

「外郎売り」のせりふ

拙者親方と申すは、お立合いの中に、御存じのお方もござりましようが、お江戸を發つて二十里上方、相州小田原一色町をお過ぎなされて、青物町を登りへおいでなさるれば、欄干橋虎屋藤衛門、只今は剃髮致して、円齊となります。元朝より大晦日まで、お手に入れます此の薬は、昔ちんの国の唐人、外郎という人、わが朝へ来り、帝へ参内の折から、この薬を深く籠め置き、用ゆる時は一粒ずつ、冠のすき間より取り出す。

依つてその名を帝より、とうちんこうと賜わる。即ち文字には「頂き、透く、香い」と書いて「とうちんこう」と申す。只今はこの薬、殊の外世上に弘まり、方々に似看板を出し、イヤ、小田原の、灰俵の、さん俵の、炭俵のと色々に申せども、平仮名をもつて「ういろう」と記せしは親方円齊ばかり。もしやお立合の内に、熱海か塔の沢へ湯治においでなさるるか、又は伊勢御参宮の折からは、必ず門違いなされますな。お登りならば右の方、お下りなれば左側、八方が八つ棟、表が三つ棟玉堂造り、破風には菊に桐のとうの御紋を御赦免あつて、系図正しき薬でござる。

イヤ最前より家名の自慢ばかり申しても、ご存じない方には、正身の胡椒の丸呑、白

① ゆっくりと落ち着いて。続く限り息を長くためて「が」、までは息を切らないように

② もつたいぶつて、調子をかえて

③ 威張つて得意気に

④ 息を吸つて、やや重々しく

⑤ 物珍しいように

⑥ 「外郎」を粒立てて

⑦ 「とうちんこう」を粒立てて

⑧ 軽く

⑨ 「ばかり」に力を入れる

⑩ 一気に

⑪ 落ち着いた気持で納まりをつける

⑫ 気軽にテンポを速く

⑬ 好い気持で

⑭ 一転して見物の注意をひくように

⑮ 「のど」に力を入れて止める
⑯ 「開合」から「盆ごぼう」まで
一気に

河夜船、さらば一粒食べかけて、その気味合をお目にかけましよう。先ずこの薬をかように一粒舌の上にのせまして、腹内へ納めますると、イヤどうも云えぬは、胃、心、肺、肝がすこやかになりて、薫風喉より来たり、口中微涼を生ずるが如し。魚鳥、茸、麵類の食合せ、其の他、万病速効ある事神の如し。さて、この薬、第一の奇妙には、舌のまわることが、銭ゴマがはだして逃げる。ひよつと舌がまわり出すと、矢も楯もたまらぬじや。

そりやそりや、そらそりや、まわつてきたわ、まわつてくるわ。アワヤ咽、さたらな舌に、カ牙サ歯音、ハマの二つは唇の軽重、開合さわやかに、あかさたなはまやらわ、おこそとのほもよろを、一つへぎへぎに、へぎほしはじかみ、盆まめ、盆米、盆ごぼう、摘蓼、摘豆、つま山椒、書写山の社僧正、粉米のなまがみ、粉米のなまがみ、こん粉米の小生がみ、縹子ひじゆす、縹子、縹珍、親も嘉兵衛、子も嘉兵衛、親かへい子かへい、子かへい親かへい、ふる栗の木古切口。雨合羽か、番合羽か、貴様のきやはんも皮脚絆、我等がきやはんも皮脚絆、しつかわ袴のしつぽころびを、三針はりなかにちよと縫うて、ぬうてちよとぶんだせ、かわら撫子、野石竹。のら如来、のら如来、三のら如来に六のら如来。一寸先のお小仏におけつまずきやるな、細溝にどじようにより。京のなま鱈奈良なま学鯉、ちよと四、五貫目、お茶立ちよ、茶立ち

よ、ちやつと立ちよ茶立ちよ、青竹茶筌でお茶ちやつと立ちや。

来るわ来るわ何が来る、高野の山のおこけら小僧。狸百匹、箸百膳、天目百杯、棒八百本。武具、馬具、ぶぐ、ばぐ、三ぶぐばぐ、合せて武具、馬具、六ぶぐばぐ。菊、栗、きく、くり、三菊栗、合せて菊、栗、六菊栗。麦、ごみ、むぎ、ごみ、三むぎごみ、合せてむぎ、ごみ、六むぎごみ。あの長押の長薙刀は、誰が長薙刀ぞ。向うの胡麻がらは、荏のごまがらか、真ごまがらか、あれこそほんの真胡麻殻。がらびい、がらびい風車、おきやがれこぼし、おきやがれ小法師、ゆんべもこぼして又こぼした。

たあぶぼぼ、たあぶぼぼ、ちりから、ちりから、つつたつぽ、たつぽたつぽ一丁だこ、落ちたら煮て食お、煮ても焼いても食われぬものは、五徳、鉄きゅう、かな熊童子に、石熊、石持、虎熊、虎きす、中にも、東寺の羅生門には、茨木童子がうで栗五合つかんでおむしやる、かの頼光のひざもと去らず。

鮒、きんかん、椎茸、定めて後段な、そば切り、そうめん、うどんか、愚鈍な小新発地。小棚の、小下の、小桶に、こ味噌が、こ有るぞ、小杓子、こ持つて、こすくつて、こよこせ、おつと合点だ、心得たんぼの川崎、神奈川、程ヶ谷、戸塚は、走つて行けば、やいとを摺りむく、三里ばかりか、藤沢、平塚、大磯がしや、小磯の宿を七つ起きして、早天早々、相州小田原とうちん香、隠れござらぬ貴賤群衆の花のお江戸

①⑦ 語尾に力を入れて

①⑧ 高い調子で

①⑨ 中音で普通に

②⑩ 「ぞ」を強調して止める

②⑪ ポンポンといいテンポを速める

②⑫ 威張って荘重に

②⑬ 「小新発地」まで一気に

の花ういろう、あれあの花を見てお心をおやわらぎやという。産子、這子に至るまで、この外郎の御評判、御存じないとは申されまいまいつぶり、角出せ、棒出せ、ぼうばうまゆに、臼、杵、すりばち、ばちばちぐわらぐわらぐわらと、羽目を弛して今日お出でのいづれも様に、上げねばならぬ、売らねばならぬと、息せい引っぱり、東方世界の薬の元々、薬師如来も照覧あれと、ホホ敬つて、ういろうは、いらつしやりませぬか。

②④ 「や」を強調して

②⑤ 「いづれも様に」までゆるやかな調子で

②⑥ 「ならぬ」と「ならぬ」との語尾に力を入れて

②⑦ ゆっくり重々しく

②⑧ 笑い声で

②⑨ おじぎをして